

## 「恵比寿映像祭2025」の見どころ

### 1. 「ドキュメント／ドキュメンタリー」をキーワードで掘り下げる

「フェイクニュース」という言葉が日常的に使われるようになった現代では、ドキュメント／ドキュメンタリー（事実）とフィクション（虚構）の境界線は曖昧になり、真実に辿り着くことは容易なことではありません。そのことは、同時にどれだけ現代が、イメージや言葉の情報で溢れているかの証左でもあると言えるでしょう。恵比寿映像祭2025では、「イメージ」「言葉」「身体」「時間」「パフォーマンス」などのキーワードから、さまざまな時代のアーティストたちの創作を読み解くことで、「ドキュメント／ドキュメンタリー」を拡張し、掘り下げていきます。

### 2. 総合テーマ「Docs—これはイメージです—」のはじまり

恵比寿映像祭2025の総合テーマ「Docs—これはイメージです—」は、恵比寿映像祭2024で決定した第2回コミッション・プロジェクトの4名のファイナリスト、**小田香**、**小森はるか**、**永田康祐**、**牧原依里**が準備している新作に共通する、さまざまな「ドキュメント／ドキュメンタリー」の要素から着想を得たものです。これらのアーティストは、それぞれの作品を通じて個人的な体験から社会的な課題、歴史と現在の交錯、身体や空間の在り方まで、多彩なテーマを掘り下げています。この共通点から生まれた視座が、恵比寿映像祭2025の方向性を形づくり、他の展示や上映プログラムの構成にも深く影響を与えています。



小田香コミッション・プロジェクトのための新作  
《母との記録「働く手」》2025年

### 3. 広がる「Docs」、美術館の外へ「オフサイト展示」

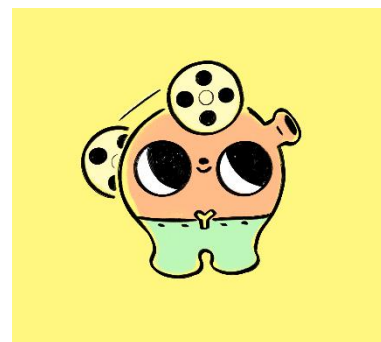
明るい色の画像の背景に、テキストと音楽を結びつける、独自の視覚表現によって文化や歴史を再文脈化するメディア・アーティスト、**トニー・コークス**（アメリカ）は、東京都写真美術館館内各所での展示や上映のほか、JR恵比寿駅から恵比寿ガーデンプレイスまでを繋ぐスカイウォーク（動く歩道）など、恵比寿ガーデンプレイス各所の異なるサイトでも作品を展開します。2024年にマッカーサー財団「天才賞（Genius Grant）」を受賞し、さらに期待の高まるトニー・コークスの大規模な日本初展示をお楽しみに。



トニー・コークス インスタレーション風景、2023-2024年（Dia Bridgehampton、ニューヨーク）  
Courtesy the artist, Dia Art Foundation, New York, and Greene Naftali, New York. Photo: Bill Jacobson Studio, New York [参考図版]

### 4. みんなが楽しめる恵比寿映像祭へ

恵比寿映像祭2025では、乳幼児から高齢者、障害の有無や国籍を問わず、誰もが楽しめるフェスティバルを目指し、手話通訳つきインクルーシブワークショップやアニメーション・オープンワークショップなどの教育普及プログラムを用意しています。また、解説なしに直感で楽しむことができる、幅広い層に向けた作品も多数展示しています。さらに、第14回恵比寿映像祭で登場した映写機から生まれた不思議なキャラクター「ye(b)izoちゃん」が再登場！「ye(b)izoちゃん」を導き役に、会場で配布する公式タブロイドを通じてより一層フェスティバルを楽しんでください。



## 恵比寿映像祭2025の参加アーティストについて

「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025」は、総合テーマ「Docs —これはイメージです—」のもと、独自の視覚表現によって文化や歴史を再文脈化するメディア・アーティストのトニー・コークス（アメリカ）による日本初公開作品群が美術館内各所やオフサイト会場で展示されるほか、アジアからは、劉玨（台湾）によるビデオと空間インスタレーション作品、昨年ヴェネチア・ビエンナーレで発表されたカウィータ・ヴァタナジャンクール（タイ）による映像作品、アーカイブおよびフィールド・リサーチを通じて支配的なナラティブに挑戦するズリヤギータ・ディア（シンガポール）によるメディア作品、映画監督アピチャップン・ウィーラセタクンの映像の時間に関する写真作品が出展されます。造形的思考を写真や映像に接続させ有機的な映像空間をつくりだす角田俊也、自身で撮影した膨大な量の写真から映像を切り抜きつくりだす林勇気、2021年に他界し、セクシュアリティ表現と闘い続けたパフォーマンス・アーティスト、イトー・ターリのアーカイブ展示からテーマを掘り下げ考察します。

東京都コレクションからは、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット、ジュリア・マーガレット・キャメロン、杉本博司などの写真作品、SNSで流行りのショートアニメーションの先駆けとも言える古川タクの映像装置や藤幡正樹のメディアアート作品を、マイグレー



トニー・コークス《The Queen is Dead ... Fragment 2》インスタレーション風景（ローマ現代美術館[MACRO] 2021年 作家蔵 Courtesy the artist, Greene Naftali, New York, Hannah Hoffman, Los Angeles, and Electronic Arts Intermix, New York. Photo: Simon d'Exéa. [参考図版]

ション修復※を施して再展示するなど、国境や時代を超える魅力あるラインナップが展示されます。

本映像祭では、「ドキュメント／ドキュメンタリー」再考の視点から写真や映像を主としたさまざまな表現から、言葉とイメージの関係性を再考します。総合テーマに即したコレクション作品によって奥行きのある展示を実現します。

そして、3月23日まで継続して展示を行う3階展示室では、第2回「コミッション・プロジェクト」で選出された4名のファイナリストによって恵比寿映像祭2025のために制作された作品群を展示します。小田香は、イメージと音を介して「人間の記憶のありか」について探求する作品を展開し、小森はるかは、独自の方法で記憶を伝承するドキュメンタリーの在り方を考える作品を出品します。永田康祐は、食や植民地の歴史の研究に基づいて、さまざまな語りが交錯する複合的な作品を出品し、ろう者である牧原依里は、身体感覚の視点から作品制作に取り組み、映像の実験的な手法を提示します。ファイナリストそれぞれの個人的、社会的、歴史的な背景や問題意識を通して「ドキュメント／ドキュメンタリー」を探ります。

※マイグレーション修復とはシステムやデータなどを新しい環境へ移行すること



藤幡正樹 《Beyond Pages》1995年 東京都写真美術館蔵 “Masaki Fujihata: Augmenting the World,” LAZANIA Centre for Contemporary Art exhibition, Gdańsk 2017, Photo: Paweł Józwiak